

「主のもとに隔てなし」  
使徒言行録 10 章 1-8 節

復活された主イエスは、弟子たちに、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください」とお命じになりました。また、天に昇っていかれる時も「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」と言われました。このように、キリストの福音は、ユダヤ人だけではなく、地の果てまで、世界中のすべての民に宣べ伝えられなければならないものでした。それが、イエス・キリストの御心でした。

しかし、ユダヤ人にとっては、この主イエスの言葉は理解し難いことでした。なぜなら、彼らは心の中にとても分厚い壁を持っていたからです。それは異邦人に対する隔ての壁です。旧約聖書の時代以来、ユダヤ人たちは、自分たちは神さまに選ばれた民であるという強い自負を持っていました。そして、他の民族のことを「異邦人」と呼んで、交わりを避けていました。また、救い主を待ち望む信仰についても、自分たちユダヤ人のためのメシアの到来を待ち望んでいたのです。異教の神々を拝み、律法を持たない異邦人は、神さまの救いの外にある人々と捉えていました。ですから、主イエスこそメシアであるという信仰を与えられ、それを宣べ伝えていった使徒たちにとっても、伝道の対象としていたのは基本的にはユダヤ人たちだったのです。そのような異邦人に対する厚い隔ての壁。それは、キリスト者の集まりである教会においてすら、そう簡単に乗り越えられるものではありませんでした。

けれども、神さまのご計画は、地の果てにまで福音が宣べ伝えられ、全ての人々が救われることでした。この神さまのご計画が進められるためには、ユダヤ人キリスト者たちは変わらなければならなかったのです。そのために、異邦人であるコルネリウスとユダヤ人であるペトロに、聖霊なる神さまが働かれたのです。

ローマ人の軍人であったコルネリウスは、割礼は受けていませんでしたが、ユダヤ人と同じように、唯一の神を信じ、家族ともども神を畏れていました。そしてその信仰が、生活や行動にしっかりと結びついていました。民に多くの施しをし、絶えず神に祈る、そのような人でした。彼の部下と召し使いは、あとの場面でコルネリウスのことを、「正しい人で神を畏れ、すべてのユダヤ人に評判の良い人です」とペトロに紹介しています。

コルネリウスは敬虔な信仰を持ち、救いを神に求め続けていた人でした。そして今、神さまはその願いと祈りを確かに聞き届けてくださいました。そして、その救いのために神さまは御業を進められるのです。

神さまは、コルネリウスに向かって「コルネリウス」と、名前を呼んで語りかけられました。神さまは、救おうとされる者の一人一人の名前を呼び、召し出されるのです。それは、私たちに対してもそうです。私たち一人一人の名前を呼んでくださり、会うべき人、行くべき所を示してくださいました。私たちはそうやって救われたのです。もしかしたら、それは意識しなかったことだったかもしれません。でも、確かに呼ばれたのです。だから、今、私たちはここにいられるのです。神さまの恵みのご計画の中で、覚えられ、捉えられ、救われてきたのです。

そうであれば、今度は、私たちがその恵みのご計画のために用いて頂く番です。コルネリウスのように救いに与った私たちは、今度は、ペトロのように福音を伝えていく者とされていく。神さまは、それを願っておられます。そうであるからこそ、私たちの信仰生活、祈りの姿を見て、神さまを知りたいと思う人が一人でも起こされるように用いて頂きたいと、心から願ってまいりたいと思います。